

# 前四世紀アッティカの墓碑銘分析

## 第 1 部

アテネ戦没者「半神化」とその政治的・社会的背景

馬 場 恵 二

## Heroisation of the Athenian War Dead and its Political and Social Background

Keiji BABA

Starting from a curious comment of Pausanias (Description of Greece I 29.4) on the Athenian war dead at Drabeskos (Thrace) in the year of 464 B.C. that they were deadly struck by lightning, the author reconsiders the political and social background of the development of heroisation of the Athenian war dead. He accepts W. Burkert's Elysium-theory that the fate of the *ἐνὶ λύσσοις* (those who were struck by lightning) would be equivalent to 'being in the Elysion' and does find in Pausanias' curious comment the first evidence for the formal heroisation of the Athenian war dead. Then, the author proceeds to the problems of the origin of the Athenian state burial of the war dead. Special attentions were paid to the political background of Kleithenes' Reform and to the social-political background of contemporary *skolia* and the appearance of the *Tyrannicide*-cult. The growth of the Athenian *boule* and the Athens-Persia relations were also discussed in the context of the development of the Athenian *Ostracism*. Author's view on the introduction of the Athenian state burial that it took its place about 487 B.C. is strengthened considerably by the existence of anti-Persian *ostraka* in 480s B.C. Athens.

## 《個人研究》

## 前四世紀アッティカの墓碑銘分析

## 第1部

## アテネ戦没者「半神化」とその政治的・社会的背景

馬 場 恵 二

パウサニ阿斯『ギリシア案内記』第1巻29.4は、アテネ市北西の市門ディビュロンを出てアカデミア街道沿いの「アテネ国有墓地」(Δημόσιον Σῆμα)に足を踏み入れたところで、トラシュブウロス(Θρασύβουλος)、ペリクレス(Περικλῆς)、カブリアス(Χαβρίας)、フォルミン(Φορμίων)の4基の個人墓を紹介したのに続けて戦没者国葬墓に移る。前490年の Marathon 合戦の戦没者たちは「市民戦士の鑑なるがゆえに」*δι' ἀνδραγαθίαν* 戦いの現場に埋葬されているとの個人的解釈を付したのち、「最初にある(戦没者合葬の)墓に葬られているのは、かつてトラキア北方のドラベスコスに至る地域を制圧したものの、窮鼠猫を噛む勢いのエドノイ族の反撃に遭って戦没した人たち」と紹介したのにつづけて、一見いかかわしいもののように見て取れる奇妙なコメントをつけている。「雷が彼らを撃ったとの伝承もある」*λέγεται δὲ καὶ ὡς κεραυνοὶ πέσσειεν ἐς αὐτούς* という記事がそれだが、正直のところその真意が分からず、岩波文庫版では注に取り上げるまでには到底至らなかった。ところが最近になって、Chr. Sourvinou-Inwood, *'Reading' Greek Death. To the End of the Classical Period* (1995), p. 49f. を通して、古代ギリシア人の「極楽」ともいうべき「エリュシオン」*Ἠλύσιον* (Elysion = Elysium) の語源を *ἐνὲ λύσιος* 「雷に打たれた者」という特異な語句と関連づけて解釈を試みた W. Burkert が、「雷に撃たれた者たちは、他の原因で死んだ者たちとは違って、死んで朽ち果てたとはみなされず、もっと高次元の生命に与り、至福者の住むエリュシオンに生きつづける者とみなされた」との見解を打ち出していることを知った。筆者は先の論文「古代ギリシアの戦没者国葬と私人墓」『駿台史学』93 (1995), 79頁で、前432年のポティダイア遠征のアテネ軍戦没者国葬墓の墓碑銘 (CEG 10 = IG I<sup>3</sup> 1179) の一節

*αἰθὲρ μὲν φσυχὰς ὑπεδέχσατο, σόμ[ατα δὲ χθὸν]/τὸνδε.*

「彼らの魂を受け入れしは天の霊気、肉体(を受け入れし)は大地」

を証拠として、当時のアテネ国葬戦没者たちが半神とみなされていたことを指摘しておいた。「天の霊気」と試訳したギリシア語 *αιθήρ* (当該碑文では *αιθέρ* の表記) は、ホメロス英雄叙事詩 (*Ilias* 2. 412) では大神ゼウスの住まう光り輝く天を指し、ギリシア人の宇宙観では、コスモス (*κόσμος*) の最も高く、最も純粋な部分を意味していた<sup>1</sup>。平凡な一般人の死後の魂 (*ψυχή*) は、本人の肉体 (*σώμα*) を離れたのち、下界の冥界である「ハデスの館」に赴き、実体の無い影と化してしまうとみなされていたのとは大きな違いである。

死者の、実体の無い影の存在という古代ギリシア人の代表的な来世観を深く印象づけてくれる典型的事例は、何と云っても、ホメロス『オデュッセイア』第11巻の有名なくだりであろう。冥界探訪のオデュッセウスに対する英雄アキレウスの霊が彼に向かって、「どうしてまたおぬしは、冥府に降ろうなどという気を起したのだ、ここはなんの感覚もない<sup>εἶκος</sup>骸、果敢なくなった人間の幻にすぎぬ者たちの住む場所であるのに (*ἐνθα τὲ νεκροὶ ἀφραδέες ναίουσι, βροτῶν εἰδῶλα καμόντων*)」(岩波文庫版松平千秋訳) と問いかけると、オデュッセウスはかつての英雄を慰めて、「今はまたこの冥府に在って、おぬしは死者の間に君臨し権勢を誇っているではないか。さればアキレウスよ、死んだとて決して歎くことはないぞ」と励ますのだが、それに対してアキレウスはこう答えるのである。

「栄光のオデュッセウスよ、わたしの死を軽率には云々しないでくれ給え。わたしとしては、たとえ人様の耕地に縛られた日雇いとして人に使われる身になってでも(地上で)働きたいのだ。その旦那というのが碌な土地財産もなければ、生活の大した実入りも期待できないような者、ときてそれは構わない (*μὴ δὴ μοι θάνατόν γε παραύδα, φαίδι' Ὀδυσσεύ./ βουλοίμην κ' ἐπάρουρος ἔων θητευεῖν ἄλλῳ./ ἀνδρὶ παρ' ἀκλήρῳ, ὧι μὴ βίотας πολὺς εἴη*. 488ff.). 朽ち果てた死者ども全員の王として君臨するより、よほどましなのだ。』<sup>2</sup>(*Odysseia* 11. 489–491)

社会最低辺の、半ば奴隷の日雇いに身を落としてでも地上(この世)に生きたいという亡者アキレウスの強い願望は、裏を返せば古代ギリシア人の来世観の暗澹たる有様をみごとに物語っている。前5世紀以前のアッティカ私人墓韻文墓碑銘98例のうち「ハデスの館」行きに直接言及があるのはわずか3例にしか過ぎないが<sup>3</sup>, *CEG* 102(c. 400 B.C.) の、戦没者のものと推定可能な私人墓の墓碑銘がその冒頭に「意気盛んなる冥界神ハデスの娘御、女主人にましますソフロシユネス様」*πότνια Σωφροσύνη θύγατερ μεγαλόφρονος Αἰδῶς* と呼びかけて自分の戦死を示唆しているその手法は、これまた死者の「ハデスの館」行きを当りまえのこととする当時の民間の通念を反映するものと捉えることができる。「ハデスの館」行きを明言する墓碑銘の事例がごく限られているとはいえ、この時期の墓碑銘には、先の論文55–61頁でも実例を示したように、「勇士テティコス<sup>4</sup>を悼みつつ通り過ぎ給え、彼、戦場の露と消え、若き青春を失いし者なれば」*Τέτιχον οἰκτίρας ἀνδρ' ἀγαθὸν παρίτο, ἐν πολέμοι φθίμενον, νεαρὰν ἡβὲν ὀλέσαντα* *CEG* 13(c. 575–550 B.C.) とか、「足を止め、哀悼せよ、戦没の戦士クロイソスの墓に向かい」*στέθι: καὶ οἰκτιρον: Κροῖσο παρὰ σῆμα θανόντος* *CEG* 27(540–530 B.C.), 「深き哀悼に落涙、嗚咽しつつ立つ吾(=墓石)は、いまは亡きナクソスの人アナクシラスの

石碑の墓」*δακρυόεν πολυπενθές Ἀναχσίλα ἐδ' ὀλοφυνδὸν/λάϊνον ἔστεκα μνῆμα καταφθι{με}/μένο* IG I<sup>3</sup> 1357=CEG 58(510–500 B.C.)などに代表されるように、戦没者であるか否かにまったく関わりなく、死者の慙愧の念と、死者に対する親族・友人の哀悼・惜別の情が生地のままむき出しに表現されていて、墓碑の周囲には何か物悲しい陰気な雰囲気の不気味にただよっているのが特色である<sup>4</sup>。アルカイク期の墓標の天辺飾り(ἐπιθήμα)にしばしばスフィンクス像が使用されていて注目されるが、韻文墓碑銘を伴うアッティカ墓碑のうちで確実な事例に限れば、CEG 25(=IG I<sup>3</sup> 1241. c. 540–535 B.C.)とCEG 30(=IG I<sup>3</sup> 1274. c. 535–530 B.C.)の2例にしか過ぎない。墓標のスフィンクス像のもつ意味については、テッサリア地方デメトリアス遺跡出土の前5世紀半ばの墓碑銘に、「スフィンクスよ、ハデスの犬(χαῖδ[α]ο κύον)なるお前は、そこに坐りながら、常にどのような敬意を払いつつ、いまは亡き[ヘロフィロス? ]の[葬祭? ]を警護しているのか(φυλάσεις)」(W. Peek, *Griechische Vers-Inschriften* [GVI], 1831=CEG 120)との一節が読めるところから、スフィンクスは現世と来世との境界を自由に往来できる両界の媒介者として、他界入りの死者の靈魂を警護する一方、遺族など残された者たちによる葬祭儀礼の実行を監視する存在とみなされていた可能性がある<sup>5</sup>。

以上のように、前464年のドラベスコス遠征のアテネ軍戦没者に関するパウサニアスの簡略なコメントと、前432年のポティダイア遠征戦没者国葬の墓碑銘の双方を通して戦没者国葬の背後に窺われる国家側の戦没者観は、同時代私人墓の墓碑銘の世界のそれとは質的に異なっているのである。ところで、トラアキ方面遠征のアテネ軍戦没者の名を所属部族毎に一本ずつの石碑に刻んだと推定できる国葬墓墓碑の断片が出土していて、少なくとも3本の石碑の存在が確認されている<sup>6</sup>。現存戦没者表には戦地ドラベスコスの項目が残されておらず、この年度の戦没者全員を称える韻文墓碑銘も残念ながら未発見のままだが、「雷が彼らを撃った」*κεραυνοὶ πέσσιεν ἐς αὐτούς*と伝えるパウサニアスの情報源はもしかすると、彼が現場で克明に読んだ(Paus. I. 29.5参照)この墓碑銘そのものであって、その一節にこのような表現が含まれていたのかもしれない。もしそうであれば、アテネ戦没者国葬制度運用初期の段階ですでに戦没者を国家的英雄、国家救済の半神とみなすアテネ当局筋の公式見解が打ち出されていたことになる。推測に推測を重ねての状況証拠であるが、やはり無視はできない状況証拠ではある。

アテネ最古の戦没者国葬(とは言っても合戦現地の埋葬)の事例であるテロスの場合<sup>7</sup>、ヘロドトス脚色の「クロイソス対話」におけるアテネの改革者ソロンは、テロスをもって「万人最高の仕合わせ者」*πάντων ὀλβιώτατος* (Hdt. I. 30.2)と認めているのだが、そこに用いられている“ὀλβιος”の語は、ギリシアの神々は人間に対しても妬み深いので、人が仕合わせであったか否かはその人が人生の終点の死を迎えるまでは、当人を含めて人間だれにも分からない、とする「クロイソス対話」当該箇所文脈そのものからも、世間一般の目から見た「この世の仕合わせ者」を意味していることは明白である。来世がどうの、といった話ではない。

アテネ戦没者「半神化」の契機を与えたものとして最も重視すべきは、先の拙稿(73–77頁)でも触れたように、「僭主暗殺者」の「半神化」である。前514年の大パンアテナイア祭の賑わいに乗じ

て、史家ツキシデスの詳細を尽くした研究結果によれば（とくに Thuk. VI. 53.3-59.4）、恋のもつれが原因で（*δι' ἐρωτικὴν ξυντυχίαν*）、しかも僭主本人のヒッピスではなく、政権には直接関与していなかった弟ヒッパルコスのほうを暗殺したにしか過ぎないハルモディオスとアリストゲイトンの両者であったが、前510年の僭主政崩壊ののち、いつのまにか国家解放の志士として「半神化」されてしまうのである。アテナイオス『食卓の賢人たち』*Deipnosophistai* 所収の酒宴歌（*σκολιόν*）25編（15. 694c-696a）のうち、第10歌から第13歌までの4編は問題の僭主暗殺者を主題にしている、第11歌を除く3編は互いに部分的に重複しながら、ハルモディオスとアリストゲイトンの両者が僭主ヒッパルコスを殺害して（*τὸν τύραννον κτανέτην*）、アテネを「平等の国」にした（*ἰσονόμους τ' Ἀθῆνας ἐποίησάτην*）旨を歌い上げている。だが、第11歌の主眼はこれらとは異なり、こう歌っていて注目されるのである。

「最愛のハルモディオスよ、君は死んでなど決していない（*οὐ τί που τέθνηκας*）。至福の人たちの島に（*νῆσοις δ' ἐν μακάριων*）君はいるのだと人はみな言っている。足迅きアキレウスもおれば、テュデウスの子の勇猛の士ディオメデスもいるとされるかの地に（君は住んでいるのだ）」

「至福の人たちの島」とは、本稿冒頭で垣間見たあのエリュシオンの所在地そのものにほかならず、この第11歌こそは僭主暗殺者「半神化」理念の、現存史料では時間的に最も早いと思われる証言なのである。問題は証言の年代である。ちなみに、アリストテレス『アテナイ人の国制』58章1節には「（アテネ最高武官の）ボレマルコスは狩猟のアルテミスとエニユアリオスに対する犠牲を捧げ、戦死者のために墓場における葬送の競技を掌り、またハルモディオスとアリストゲイトンとに供物を捧げる」（岩波文庫版村川堅太郎訳）とあるが、供犠に関する用語が前半部分のオリュンポス系の本格的な神格については「犠牲を捧げる」*θύει θυσίας* であるのに対して、後半部分の僭主暗殺者については「供物を捧げる」*ἐναγίσματα ποιῆι* となっているのは、ハルモディオスとアリストゲイトンが本格的な神格ではなく「半神」*ἥρωες* として供犠を受けていたことを雄弁に物語っている。ではいつからボレマルコスは戦没者追悼競技会・僭主暗殺者祭祀の主宰者となったのであろうか。前5世紀後半の前440-432年の年代幅に年代推定されているアテネ民会決議碑文 *IG I<sup>3</sup> 131 (=I<sup>2</sup> 77)* からわれわれは、碑文当時すでにハルモディオスとアリストゲイトンの末裔には「中央市庁舎における会食権」*ἡ σίτησις ἢ ἐμ πρυτανείῳ* の栄典が付与されていた事実を知るのだが、その歴史はどうやら前5世紀半ば以前に遡る可能性が濃厚なのである。文献史料では、シケリア出身のディオドロスがアテネにおける戦没者追悼の葬送競技会（*ἐπιτάφιος ἀγών*）と葬送演説（*ἐπιτάφιος λόγος*）双方の開始を前479/8年に置いている。だが何と言っても重要なのは、パウサニ阿斯『ギリシア案内記』第1巻8章5節の記事、すなわち前480年のアテネ無血占領のさいペルシア大王クセルクセスが、市内広場の目抜き場所に建立されていたアンテノル作の僭主暗殺者群像を戦利品としてペルシアに運び去ったため、のちに（前477/6年）クリティアス（正しくはクリティオスとネシオテス）作の新作群像<sup>8</sup>をもって補ったとの記事である。これは僭主暗殺者の「半神化」が前480年以前すでに実現していた

ことを強く示唆しているにはほかならないからである。論をさらに煮詰めるにはアテネ僭主政倒壊とクレイステネスの改革前後の政治的・社会的事情の見極めが深く関わることになる。そこでペイシストラトス没後のアテネ史をごく簡潔にでも振り返って見ておく必要がある。

アテネ初代の僭主ペイシストラトスが前527年に没すると長男ヒッピアスが政権を継承し、アルコン表断片（IG I<sup>3</sup> 1031）の示すところでは、その翌年に筆頭のアルコン職に就いている。そして興味深いことには、アテネ名門アルクメオン家（*Ἀλκμεωνίδαι*）の領袖クレイステネスが彼の翌年度のアルコンになっていることも同じ碑文から分かっている。だが、前514年にヒッパルコス暗殺事件が起こり、アテネは僭主支配から解放されるどころか、以前とは比較にならない苛酷な圧政の下に置かれることになった<sup>9</sup>。この事件当時、クレイステネス一派は国外亡命中であったが、デルフォイのアポロン神殿再建請負の実績によって同地の神官団に影響力をおよぼし、巫女（*Πυθία*）の口を通した託宣の形でスパルタを「説得」して、アテネ僭主政権打倒の遠征軍派遣をスパルタ当局に決断させたのであった<sup>10</sup>。ハルモディオスとアリストゲイトン両者のヒッパルコス暗殺ではなく、クレイステネスの策謀に誘導されたスパルタの武力介入が前510年にアテネを僭主政権から解放したのである。ヒッパルコス暗殺事件については、それが反ってヒッピアス政権暴政化の引き金となって逆効果であった、との見方が前5世紀後半の両史家に共通していて、ツキシデスのほうはこの暗殺行為を「無謀極まる暴挙」*ἡ ἀλόγιστος τόλμα*とさえ断罪しているのである。ついで僭主政権崩壊後、クレイステネス一派とイサゴラス一派との間に貴族同士の旧態依然たる権力闘争が展開された。前508/7年イサゴラスがアルコン職に就任して優勢を固めたと、クレイステネスは民意反映に一層適した部族制改革を中核とする民主的政治体制創出の改革案を提示することによって、「以前は（政治から）門前払いの民衆をこのとき完全に自己の陣営に取り入れ」*τὸν Ἀθηναίων δῆμον πρότερον ἀπωσμένον τότε πάντως πρὸς τὴν ἐωτοῦ μοῖραν προσεθήκατο*（Hdt. V. 69.2）、劣勢を挽回して優位に立った。本格的な部族制改革は人口調査など長期の作業が不可欠なので、動乱渦中の当座の措置として既存の4部族を選出母体とする四百人評議会を創設し、評議会基盤の陶片追放の制度まで導入した可能性がある<sup>11</sup>。これに対抗してイサゴラス陣営はスパルタの軍事力に頼った。改革事業半ばのクレイステネスがスパルタ側からの通告を呑んで国外に亡命したあと、スパルタ王クレオメネスの率いる介入軍がアテネに出動し、その段階でさらに、アルクメオン一門に属する七百家族を追放した。ついでクレオメネスが「評議会を解散させよう」*τὴν βουλὴν καταλύειν*<sup>12</sup>と試みると、このアテネ評議会は頑強に抵抗して武力衝突にまで発展した。アテネ市民たちは一斉蜂起して（*Ἀθηναίων δὲ οἱ λοιποὶ τὰ αὐτὰ φρόνησαντες*—Hdt. V. 72.2）武器を取り、イサゴラス一派もろとも同派支援のスパルタ軍までアクロポリスに包囲して、投降の休戦交渉を相手側に余儀なくさせた<sup>13</sup>。スパルタ軍を国外に撤退させたうえでイサゴラス派残党の肅正を果たしたのち、アテネ評議会はようやくクレイステネスと七百家族を本国に呼び戻した。ここでは、クレイステネス一門の臨席なしでも、評議会主導のもとにアテネ国内政治が改革路線を突き進むように見える点を指摘しておきたい。翌年の前507/6年には、今度はスパルタに率いられたペロポネソス同盟軍ばかりか、北と東からも近隣のボイオティア、カルキスの軍

勢がアテネに対する武力介入の構えを見せ、アテネは最大の危機に立たされた。しかし、ペロポネソス同盟軍の内部対立によって西方からの脅威が解消すると、アテネ軍は近隣軍を撃破し、カルキスに対しては海峡を越えてその領内に進出したばかりか、カルキス上流市民 (*ἵπποβοῦται*) から奪った土地にアテネ市民四千を軍事的入植者としての残留させたであった (*τετρακισχιλίους κληρούχους ἐπὶ τῶν ἵπποβοτέων τῇ χώρῃ λείπουσιν*. HdT. V. 77.2)。

以上のような歴史の概観を通して出てくる最大の疑問は、「無謀な暴挙」を犯して僭主政の暴政化を招いた責任をむしろ問われるべきはずのハルモディオスとアリストゲイトンの両者<sup>14</sup>が「僭主暗殺者」として「半神化」されるに至った背景には、どのような要因が働いていたのか、その方向への動きは一体いつ始まったのかという疑問である。そして、クレイステネスとその一門の直接的指導を欠きながらもアテネ評議会が、評議会そのものの解散を画策したスパルタ王クレオメネスに対して即座に抵抗したその積極的姿勢と、事態が緊迫するや自主的に武装蜂起した民衆の意思を合流・結束させたその指導力には強く関心が惹かれる。アテネは名門領袖といった従来型の指導者に依存しなくても、富裕市民たちの合議体である評議会を基盤にひとり立ちを始めたとの印象が拭い去れないからである。そこで先ずこの観点から、アテネ市民団成熟の度合いの指標として「国家名義の奉納」の事例を検証しておくことにしよう。

前507/6年のアテネ軍の勝利に関してヘロドトス (V. 78) は、アテネの強大化を評して「自由平等ということがいかに重要な財産であるか」*ἡ ἰσηγορίη ὡς ἐστὶ χρῆμα σπουδαῖον* ということを実証したと語るほかに、このときの敵軍捕虜の身代金の十分の一でアテナ女神に奉納された青銅馬車について紹介し、その奉納銘全文すら引用しているのである (V. 77.4)。現在はアクロポリス発掘の結果、新旧2種類の奉納台座が出土していて、ヘロドトスが記録した奉納銘は前455年頃の新奉納台座のほうの銘文であったことまで判明している (*IG I<sup>3</sup> 501=CEG 179*)。前506年頃の奉納品がその後アテネ占領のクセルクセスによって前480年、広場に建立されていたアンテノル作の僭主暗殺者群像と同じように戦利品として掠奪されたか、あるいは破壊されたために、補填の新作・戦車像が改めて奉納されものと思われる。補填の行為それ自体、元来の奉納の意味の重要性を如実に反映していると言えよう。さて、問題はその奉納銘に謳われている奉納主体だが、「アテネの子ら *παῖδες Ἀθηναίων*」という文学的表現になっているが、市民団全体の名義における国家的奉納であることを明示している点が見過ごされてはならない。アテネに関する限り、文献・碑文両史料で確認できるアテネ国家名義の奉納の最初の事例なのである。つぎにデルフォイの神域における「アテネ人の宝庫」<sup>15</sup>は、アテネが国外の聖所において国家の名義でおこなった奉納の早い事例として当然注目されるが、建築装飾の様式から、パウサニアスの説くスマラトン合戦よりも古く、前500-490年頃とその建立年代が推定されているものの、残念ながら落成奉納碑文は残っていない。「アテネ人の宝庫」のすぐ東側に、アポロン神殿敷地造成の石垣を背面に利用して「アテネ人の列柱館」<sup>16</sup>が建立されていて、基壇最上段正面に横一列に大きな文字でつぎのような奉納銘 (*IG I<sup>3</sup> 1464*) が刻まれている。



‘Αθηναῖοι ἀνέθεσαν τὴν στοὰν καὶ τὰ ἡόπλ[α κ]αὶ τὰ κροτέρια ἡελόντες τὸν πολε[μίο]ν.

「アテネ市民団がこの列柱館を奉納。敵軍より武器と舳先飾りを捕獲せしにより」

パウサニアスは奉納年代をペロポネソス戦争の時期に置くが、筆者はこの列柱館発見直後の U. von Wilamowitz-Moellendorf, *Aristoteles und Athen* II (1893), 287f. の年代考証に賛成して、前507/6年の勝利に関わる国家名義の奉納と推定する。この戦争の戦没者と推測されるナクソス出身のアテネ在留外人 (μετάοικος) アナクシラスがアテネ市民団の国家名義で顕彰されている事実 (ὄν τίεσκον ‘Αθηναῖοι μετάοικον—IG I<sup>3</sup> 1357) は貴重な参考になるであろう。部族制改革の遂行によって実現した五百人評議会が正式に発足を見た前501/0年 (Aristot. *Ath. Pol.* 22.2) を過ぎると、聖所オリュンピアの地でもアテネ国家名義の戦利品奉納の事例が検出されるようになる (IG I<sup>3</sup> 1446, ‘Αθηναῖοι [τ]—ὄν ἐν Λέμν[ο]—c. 500–493 B. C. 戦利品のコリント式ヘルメットに奉納銘刻文)。アテネ国内の奉納品では戦利品のヘルメット2点が挙げられるが、いずれの銘文 (IG I<sup>3</sup> 517, 518) も奉納主体が欠欠で、一応 ‘Αθενᾶιοι の文字が補填されているものの、確実な証拠としては採用できない。やや時代を下って前5世紀七十年代になると、「アテネ国家が戦没者追悼の葬送競技会で授与せし賞品」‘Αθενᾶιοι ἄθλα ἐπὶ τοῖς ἐν τῷ πολέμῳ (IG I<sup>3</sup> 523) と銘記された青銅製の壺が現われてくる<sup>17</sup>。これは「国家名義」だけの問題にとどまらず、戦没者国葬制度の確立を示唆する点でも甚だ興味深いと言わざるを得ない。

以上の考察から分かるように、アテネは僭主政倒壊後の政治的・軍事的危機の中から民主化路線の歩みを固め、市民団共同体国家の理念を「アテネ人が…」‘Αθηναῖοι……という形で、「国家名義」の奉納や特典・賞品の授与などのさいに明白に言い表わすようになった。ヘロドトス (V 78) が、僭主政からの解放がアテネにもたらした最大の効果を「平等の発言＝言論の自由」*ισηγورίη* に置いているのも、市民団の成熟を指摘したものと理解できる。これらの点を踏まえて戦没者「半神化」の考察を深めようとするのだが、先ず問題とすべきは、前480年より以前に市内広場の目抜き場所に建立されていたアンテノル制作の「僭主暗殺者群像」である。この群像に関するプリニウス (*Nat. Hist.*, 34.17) の、「アテネ人が国家名義で肖像彫刻を建立して進げたのは僭主暗殺者ハルモディオスとアリストゲイトンの場合がおそらく万人最初の例であろう」*Athenienses nescio an primis omnium Harmodio et Aristogitoni tyrannicidis publice posuerint statuas* との指摘は、生身であった人物のこのような彫刻建立、しかも「国家名義の建立」という事態の異例さを裏書きしている。ここには私怨による殺人者の、「国家的半神」への「異例の昇格」が働いていたとしか考えられない。プリニウスはこの群像建立年代を「ローマでも王たちが追放されたのと同じ年」*eodem anno, quo et Romae reges pulsati* すなわち前510年 (アテネ僭主政倒壊の年) としている。これを素直に受けて C. Fornara-L. Samons II, *Athens from Cleisthenes to Pericles* (1991), 43も「僭主暗殺者観」の誕生とアンテノル作「僭主暗殺者群像」の建立は僭主追放直後のことと割り切っている。だが、これではいかにも早すぎるように思われる。暗殺事件から4年しか経っておらず、その事件が反って誘発させた僭主政権暴政化の記憶も人々の脳裡に生々しいのだ。「暗殺者」観の一大転換が群像建立の大前提であり、その下敷きに

アテネ裕福者階層の私的な饗宴（*συμπόσιον*）の席で歌われた「僭主暗殺者」関係の一連の酒宴歌（スコリオン）があったと思われるのである。そして「僭主暗殺者」賞賛の酒宴歌そのものにしても、「半神化」を謳っている限りは、前514年の事件から10年ないし20年の時の経過が必要であったであろう。前508/7年の反スパルタ的民衆蜂起は有力な候補ではあるが、時期尚早の感がある。R. Garland, *Introducing New Gods: The Politics of Athenian Religion* (1992) は、前477/6年の「僭主暗殺者群像」再建をもって僭主暗殺者半神祭祀の公式導入の年とみなしている（94ff., 176）。だが、事の真相に迫るには、同氏の軽視するアンテノル作・旧群像の建立の時期こそが問題なのである。この旧群像がアテネ市内広場の目抜きを占めていた事実と、クセルクセスの特記に値する戦利品として略奪された事実（Paus. I 9.5）は、「僭主暗殺者」の「半神化」ないし「半神祭祀」が前480年以前すでに公式の制度化を見ていたことを強く示唆するからである。その建立年代に関しては、細かい議論に立ち入る余裕はすでにないが、前回の拙稿（77頁）と変わらず、「マラトン合戦の数年後」とする A. Raubitschek, *Dedications from the Athenian Akropolis* (1949), 481ff. の結論を最も整合的な推論として支持する立場を今回も堅持する。

筆者は先の論文（72頁）でアテネ戦没者国葬制度創設の時期をアテネ高官職選挙方式改正がなされた前487/6年（Aristot. *Ath. Pol.* 22.5）に年代づけることを提唱し、アテネ国家によるアンテノル作「僭主暗殺者群像」の建立と、「僭主暗殺者」の「半神化」ないし「半神祭祀」の創始をこの時点に想定していたが、これらの注目すべきアテネ国内政治の変化の背景としてはすでに指摘済みの対アイギナ戦争以外にも、別の重要な要因が考えられる。ひとつは評議会ではなく民会構成員全員の投票による陶片追放実施の開始が時期的にこれとぴったり重なること（Aristot. *Ath. Pol.* 22.5）、もうひとつは同時期の陶片追放のオストラコンに「鬼畜ペルシア」のムードの漂う事実<sup>18</sup>である。そこで最後にアテネ対ペルシアの国際関係の変遷を見ておきたい。

前508/7年の民衆蜂起の加勢を得て、イサゴラス支援のスパルタ軍をアテネから撤収させることに成功した評議会は、クレイステネスとその一門のアテネ帰国を実現させたうえで、近い将来に予想されるスパルタや近隣諸国からの軍事介入に対する強力な後盾をペルシアに求めて、同盟締結交渉の使節団をサルディスに派遣した（*πέμπουσι ἀγγέλους ἐς Σάρδεις, συμμαχίην βουλόμενοι ποιήσασθαι πρὸς Πέρσας*）。ところが、使節団がペルシア側の要求する「土と水」献上の条件を自己の責任において呑んでまで同盟関係締結を果たして帰国したところ、一行は大きな非難を受けた（*οὗτοι μὲν δὴ ἀπελθόντες ἐς τὴν ἐσωτῶν αἰτίας μεγάλας εἶχον*）と伝わっている（Hdt. V 73.2f.）。前499年勃発のイオニア反乱に際してアテネは、当初は反乱勢力支援の援軍を送りながら、その後は度重なる支援要請にも応えず、それどころか、イオニア反乱の中心拠点であったミレトス市がペルシア軍の手中に落ちて（前494年）間のない頃、アテネの悲劇詩人フリュニコスが「ミレトスの陥落」*Μιλήτου ἄλωσις* を上演して観客が涙にむせぶと、アテネ当局は「身内の災禍」*οἰκῆα κακὰ* を想起させた廉で一千ドラクマの罰金を科すという注目値する政治的・社会的事件が起こった（Hdt. VI 21.2）。そしてさらに、前490年のマラトン合戦<sup>19</sup>のさなか、アテネ市内におけるペルシア内応体勢の準備完了を伝える「楯の合図」が裏切り分子によってペルシア船隊に向けて発信されたという事実がある。へ

ロドトスはその発信者がアルクメオン一門に属する者とする風聞は否定するが、「楯の合図」発信の事実そのものは認めている (Hdt. VI 124.2)。このようにクレイステネスの改革当時からマラトン合戦に至るまでの全期間を通じてアテネは、対ペルシア政策の在り方において動揺ふらつきを止めることがなかった。国政担当能力を具えた市民上層階層の間の対ペルシア路線をめぐる政治的対立の存在がここに投影されているとみなすことができよう。ところがマラトンの勝利と、その合戦の「英雄」とらんとした旧貴族タイプの実力者ミルティアデスの、マラトン合戦の翌年に強行されたパロス遠征の失敗に起因する失墜は、アテネ国内の政治的・社会的環境を一変させてしまった。フリュニコスの『ミレトスの陥落』に同胞市の死没を追体験させられて死者慟哭の涙を流したアテネ一般市民の多数部分は、反ペルシア路線の、あの「鬼畜ペルシア」の音頭に身をまかせて踊る一方、政界においても反ペルシア路線への結集に向けた政治工作が有効に作用し得る環境が生じてきたのである。N. Doenges は前掲論文 (402頁以下) で、この時期に評議会基盤の既存の陶片追放制度を、全市民を投票母体とする制度に切り替えて活用したのはテミストクレスであったと推論する。考えてみれば、ペルシア軍をマラトンの野へ案内したのが僭主政権への復帰を悲願とするヒッピ阿斯その人に他ならなかったうへは、親ペルシア路線を行くアテネの政治家どもは「僭主の友」に他ならず、陶片追放本来の目的に何ら抵触するところはないのだ。「僭主の友」排除の大義名分に名を借りて効果的に反ペルシア路線をアテネの基本的国策に固めたのが誰であれ、本稿の視点から見落とせないのは、「反ペルシア=反僭主」理念の支えとして前面に押し出されてくるのが「僭主暗殺者=国家救済の半神」の国家的承認と「自由」の謳歌であったと想定できる点である<sup>20</sup>。戦没者国葬制度の導入は前487年のヒッパルコス (カルモスの子) 追放を嚆矢とする陶片追放制度の始動と反ペルシア路線上に位置づけられる当時の対アイギナ戦争と緊密に絡み合ったものであったといえる<sup>21</sup>。

1 Cf. *Der kleine Pauly. Enzyklopädie der Antike I. Altertum 1* (1996), S. 336f. s. v. "Aither".

2 この個所は岩波文庫版松平千秋訳は借用せず筆者の試訳。

3 CEG 75 (ἀχόριον ἐς Ἀἶδα) 500-480 B.C.; 83 (ἐς Ἀἶδα κατέβη) 446-425 B.C.; 84 (βήτην δόμον Ἀΐδος ἔσω) 440-430 B.C. の3例。

4 同様の事例としては、CEG 14, 16a, 28, 32, 43, 49, 50, 51, 59, 68, 75, 84, 95, 97, 102などが挙げられる。だが、前4世紀の半ばになると、一女性の私人墓墓碑銘に、「(彼女の遺体は) 地下に眠るが、靈魂はオリュンポスに在り (αὐτῇ) ὑπὸ γῆι κεῖται, ψυχὴ δ' ἐν Ὀλύμπῳ」と刻まれている事例 (CEG 558) が検出される。

5 アルカイク期のスフィンクス像については、cf. G. Richter, *Archaic Gravestones of Attica* (1961); J. Boardman, *Greek Sculpture. The Archaic Period* (1978), 162f., figg. 224-118. なお、前5世紀後半のアッティカ墓碑はその銘文 IG I<sup>3</sup> 1287 (=CEG 86. c. 410 B.C.) の特異な表現 (ἐπι...τάφῳ ἡμ[ω]) から、墓標天辺飾りにスフィンクス像が坐っていたとの推測も可能。さらに、IG I<sup>3</sup> の補填 ([εἶθ' Ἑρμῆς ἀνάγ]οι τὸς ἀγαθὸς φθιμένος) が正しければ、碑文史料に関する限りこの墓碑銘は、ハデスへの靈魂誘導者 (ψυχαγωγός) としてのヘルメス神に言及する最初の事例として注目に値することになる。前年上演のアリストファネス『蛙』に登場したり、葬礼用レキュトスにもその姿が描かれたりしている「三途の川の渡し守」カロンについては、フォキス地方出土の前500年頃の墓碑銘 (CEG 127) に、「カロンよ、ご機嫌よう。誰もお前のことや、人生の多くの苦勞から解放された故人のことを悪しざまに言う者などいない」χαῖρε Χάρον, οὐδὲς τυ κακὸς λέγει οὐδὲ θανόντα, ἀνθρώπον λυσάμενο<ν> κομῶτο との言及があるに過ぎない。

- 6 IG I<sup>3</sup> 1144 (=IG I<sup>2</sup> 928). この墓碑にはもうひとつの断片 (IG I<sup>3</sup> 1145) と17世紀に採取された碑文拓本 (IG I<sup>3</sup> 1146) がその一部として加えられると推測されている。前464という碑文年代は Thuk. IV. 102. 2 の記述から導かれていて (cf. I. 100. 3), 碑文文字の書体もこれに適合する。
- 7 前掲拙稿46頁以下参照。
- 8 僭主暗殺者群像新作の建立年代は *Marmor Parium* § 54. l. 70f. から前477/6年ということが判明するが、制作者の名前のほうは Lucianus, *Philopseudes*, 18がクリティオス, ネシオテス両人の名を伝えている。現に、この組み合わせは同時代の奉納碑文に追記された「クリティオスとネシオテスが制作」*Κριτίος καὶ Νεσιότες ἐποίησάν τε* という彫像制作者連記の署名例 (IG I<sup>3</sup> 846-851) によって傍証が得られている。パウサニ阿斯本文のクリティアスをクリティオスに訂正するに留まらず、正しくは碑文例にならうべきだと推測できる。
- 9 Thuk. VI. 53.3; 54.5-55.3; 59.2. cf. Aristot. *Ath. Pol.* 19.1.
- 10 Hdt. V. 62.2-63.2. cf. Aristot. *Ath. Pol.* 19.4.
- 11 クレイステネスによる陶片追放制度創設を伝える新史料としてビザンツ期15世紀の写本が発見され、評議会場における投票で200票以上の得票を得た者は、財産運用の権利は保持するものの、10年間の国外追放と規定されているところから、当該の評議会は201が過半数になる400人構成であったと推測されている。これについての詳細な論議は、R. Develin, Cleisthenes and Ostracism: Precedents and Intentions, *Antichthon: Journal of the Australian Society for Classical Studies* 11 (1977), 10-21; C. Pecorella Longo, La bulé e la procedura dell'ostacismo, *Historia* 29 (1980), 257-281; N. Doenges, Ostracism and the BOULAI of Kleisthenes, *Historia* 45 (1996), 387-404参照。
- 12 Hdt. V. 72. 1f. この評議会は前注の四百人評議会と考えるのが、後述のような対スパルタ軍の頑強な抵抗を最もよく説明するように思われる。
- 13 J. Ober, *The Athenian Revolution. Essays on Ancient Greek Democracy and Political Theory* (1996), 43-52: Chap. 4 "The Athenian Revolution of 508/7 B. C.: Violence, Authority, and the Origins of Democracy" はこの民衆蜂起の革命的意義をフランス革命などのそれとの比較において大きく評価している。
- 14 ハルモディオスは事件現場で処刑。一時は雑踏に紛れて逃げたアリストゲイトンものに逮捕されて長期間拷問の結果、処刑された。Thuk. VI. 57.4; Aristot. *Ath. Pol.* 4ff.
- 15 Paus. X. 11.5. 拙訳・岩波文庫版パウサニ阿斯『ギリシア案内記』(下), 403頁, 注二一九2 参照。
- 16 Paus. X. 11.6. 拙訳・岩波文庫版パウサニ阿斯『ギリシア案内記』(下), 403頁, 注二一九13参照。
- 17 同種のものはこのほかに IG I<sup>3</sup> 524 (c. 460-450 B. C.), 525 (c. 450-440 B. C.) が出土している。IG I<sup>3</sup> 523はマラトン出土, 524はアテネ市内アンペロキビ出土だが、いずれも人骨の入った状態で発見されており、最終的に受賞者の骨壺に利用されたい。525はテキロニキ近郊で出土。戦没者追悼の葬送競技会については前掲アリストテレスの *Ath. Pol.* 58.1; Philostratus, *Vitae Sophistarum*, II 30 (623) 参照。
- 18 拙稿『ペルシア戦争—自由のための戦い』(1982), 111ff. 参照。同胞アテネ市民のカリクセノスなる人物を *ΠΡΟΔΟΤΕΣ* (προδότης) と「売国奴」呼ばわりしている陶片に接したとき筆者は、大東亜戦争後半、日本の旗色の悪化が表面化ようになった段階で、プロテスタント牧師の息子として牧師館から「国民小学校」に通学していた筆者に対して浴びせられた「売国奴・非国民」の罵声や卑劣や罵詈雑言を思い出して胸がきつく絞められた。われわれ「国民小学校」の生徒たちが「鬼畜米英」を唱和させられたのに似通ったような「鬼畜ペルシア」の政治宣伝が、前5世紀八十年代のアテネでも幅を利かして、国内政治の場での政敵追い落としの道具に用されたのであろう。そのようなオストラコンを目にすると、隔絶した時代と場所の他人事とは済まされない気持ちに襲われてしまう。
- 19 ヘロドトスは最高武官のカリマコスに積極的の出動に促す提言の中で僭主暗殺者ハルモディオスとアリストゲイトンの「歴史的功業」に言及しているが、現在では奉納碑文 (IG I<sup>3</sup> 1015bis=CEG 318) の出土によって、合戦時アテネ軍本営の置かれたヘラクレスの聖所の位置が確定し、アテネ軍の当初からの積極的姿勢が読み取

前四世紀アッティカの墓碑銘分析・第1部 アテネ戦没者「半神化」とその政治的・社会的背景

れるので、最高武官カリマコスの逡巡を臭わすヘロドトスの「対話」は、後の六十年代にキモン一派によってなされた「ミルティアデスの名誉回復」の主張に影響されているものと推測でき、「僭主暗殺者半神化」の証拠としては採用できない。

- 20 「自由」*ἐλευθερία* という抽象名詞の初出例は筆者の知るかぎりでは、前480年頃のアッティカ土器に刻まれている酒宴歌（スコリオン）とおぼしき韻文「節度弁えたる良識を…（欠）…の内に、ギリシアは〈自由〉に麗しき花冠を得たり」*σοφροσύνην ἐνὶ κλά[...ἡλλάς ἐλε]υθερίας καλὸν ἔχει στέφανον* (CEG 440) と「テミストクレスの決議」(Meiggs-Lewis no. 23) に見える「(アテネ市民) みずからと他のギリシア諸国の自由のために異民族軍を討つべし」*ἀμύνεσ[θαι] τ[ὸ]μ βάρβαρον ὑπὲρ τῆς ἐλευθερίας τῆς τε ἑαυτῶν [καὶ τῶν ἄλλων Ἑλλήνων]* (ll. 14ff.) の2例であるが、どうもマラトン合戦の勝利以前にはまだ存在しなかった抽象名詞の単語のようである。ペルシア戦争を「自由のための戦い」とする見方は前5世紀八十年代の所産と見て正しいようである。
- 21 テミストクレスの軍船建造案提言についてプルタルコス「テミストクレス伝」4章2節は「アイギナ人に対する市民たちの怒りと敵愾心とを利用して」対ペルシア戦争用の軍船を建造させたと解説しているが、本稿の立場からすれば非常に興味深い。なお、プルタルコス同書3章5節も参照。

(ばば けいじ)